

顔に自分の顔を近付ける。涙がジュリアンの顔に落ちる。そうしたら息子の顔をペロペロ舐め始めた。「ジュリアン」と呼ぶと何か言おうとしているが声が出ないようだ。持っていた綿花に水を含ませて口に当てる頭を持ち上げようとするが力が尽きてしまう。何度も何度も持ち上げようとする。首を支え顔を横に向け水を含ませた綿花を当てる。今度は上半身を必死になって起こそうとする。点滴チューブが抜けやしないかと心配するほど一生懸命起き上がろうとする。少し上半身が起こせた。器から自分で水を飲む。

もう大丈夫だ。長居して疲れさせるといけないので10分くらいで医院を出た。二人とも嬉しくて嬉しくてお互い顔を見せないようにして歩く。これから毎日会えるのだ。先生がおっしゃった「ジュリアンは今一生懸命生きようと頑張っているから毎日会いに来てやってくれ」と。先生に感謝する。

これから忙しくなる。ジュリアンが退院するまでに静かに暮らせる場所を探さなければ。嫌な思いをしたところへは連れて帰れない。息子と二人で何件も何件も不動産屋を当たる。大型犬を家の中へ入れても良いとやっとのことでOKが出る。ジュリアンに面会した後少しずつ荷物を運ぶ。待ちに待った退院の日が来た。1ヶ月分の薬をもらい引っ越し先へ。

3月8日 今日から3人の新しい生活が始まる。ジュリアンは人なつっこいのですが他の犬とも仲良くなり近所の方達も可愛がって下さる。ジュリアンの姿が見えると前を通る方々は声をかけて下さる。近くのおじいさんも「おおジュリ」と自転車で通り過ぎて行かれる。息子が出かけると悲しい声を出し塀に手を置いて立ったままずっと見送っている。その姿を見て近くの女性が話し掛けて下さる。「お兄ちゃんはずう帰ってくるからね」と。「クーン、クーン」と返事をする。「よしよし」と

6時20分頃そこで倒れる。全身痙攣口からはヨダレ発作が治まるまで待つ、起き上がる。ゆっくり家まで帰る。薬を飲ませる。主治医に電話。その間も全身痙攣。8時に家を出る。車中でも何回か。1時間後あと1〜2分で着くというところでジュリアンが「キューンキューン」と鳴きながら助手席の息子と私の間に顔を置く。見ると目に涙をいっぱい溜めている。息子は「ジュリアン、ジュリアン」と声をかけている。医院に着き先生が抱いて入る。「預かりますから」と言われ「お願いします」と言って帰る。11時頃電話「発作が治まらないので鎮静剤を打って寝かせます」と。「2時間は横になっていると思うので午後1時に経過を連絡します。鎮静剤は心臓に負担がかかるので一応覚悟はしておいて欲しい」と言って電話は切れる。2〜3分遅れてベルが鳴る。

息子が取る 「死んだって」

2時まだ温かいジュリアンに会う。息子の腕の中で眠らせてやりたかった。側に居てやればよかった。

4時霊園でお祈りをして頂く。

6時火葬。

7時お骨の説明をして下さる。「頭と首にとっても短い期間に想像もつかない程強い衝撃が加えられている。白でなければならぬ骨が真っ赤です」

やっぱり訓練所の所長が何度も何度も私達の目の前で叩いたのが原因だ。叩くというより殴られたのだ。あのSBドッグスクールの所長の暴力が頭や首に傷をおわせていたのだ。あの3週間こんな目に合わせたのだ。人間のすることだろうか。「肝臓も心臓も2オの子と思えない程ロボロになっている。こんなひどいお骨は見たことがない」「テンカン発作の薬の副作用で肝臓が悪くなる」と説明は受けていた。でもここまでひどくなっていたなんて考えもしなかった。悔しい。何てひどいことをジュリアンを利用するだけでなくこんな残酷なことをして返すなんて許せない。「SBドッグスクールの所長の鬼」

ジュリアンは家へ帰って来るまで良く生きていてくれた。どんなに辛く苦しかったことだろう。しんどかったろう。少しの間だが元気になって安心させてくれた。この子は最後の最後まで我々を思いやってくれた。何て子だろう。入院中の時の所長の言い分は「そっちへ帰って倒れたんだから、訓練所は関係ない」「先天的なものじゃないんですか？」とも。

ジュリアンは安らかに眠れる日が来るのだろうか。あんなに苦しみ続けて。元気で自由だったのはたったの1年しか与えてやれなかった。あとの一年の半分は訓練所で辛い思いをし人を信じられなくさせてしまい残りの半年間はテンカン発作と薬づけにしてしまった。何と云って詫言たら良いのか償いようがない。愚かで勇気を出せなかった自分が悔やまれる。ジュリアンが亡くなって1週間後の5月12日お位牌を抱いてSBドッグスクールへ行く。所長は居ない。担当だった岩田さんに会わせて欲しいと言うと「辞めた」という。「やっぱり」と思った。

「所長の暴力のせいでこんな姿になった」と言うのと「所長は関係ない」「岩田さんが担当だったんだから」と申し合わせていたかのように皆同じことを言う。「二度と同じ犠牲者(犬)を出さないで下さい。暴力を振るって頭を傷つけるなことはいけません」というと「うちは叩いたことないですよ」とニヤニヤしながら言うのだ。位牌を目の前にしているのに笑っているのだ。悔しさよりもこの人達が気味悪くなって足が震えてきた。半年間自分達の側に居た犬が死んだというのに平気なのだ。笑い事なんだこの人達にとっては。

ひょっとしたら岩田さんも被害者なのかも。いつも弱いものが犠牲になるのか。もう一つ気になっていることがある。訓練所に来ていた時岩田さんが所長に「??」さんから電話です。訓練所から帰って犬が死んだということなのか。どうしても電話に出してくれ「おらん言っとけ」の会話。私のすぐ後ろで話していた。SBドッグスクールでは日常の事なのだろうか。そういうことが平気になってくるからニヤニヤ気味の悪い笑いが出来るのか、ぞっとする。

そんなところにジュリアンを置いていたなんて本当にどうやって天国へ送ってやったら良いのだろうか。

SBドッグスクールの所長の前で私達は命を絶つことも考えた。そうしてでも恨みを晴らしたかった。

「お母さんも洋ちゃんも辛くて苦しいよ。ジュリアンごめんね。」

「どうか同じことが繰り返されません様に」と祈ります。

M・Y



頭を撫でてもらって落ち着く。穏やかな日が流れる。

そして1週間後の4月15日河原を散歩中発作を起こす。薬を飲ませるが何度も起こす。先生に尋ねられるが思い当たることはリードを引っ張った直後だと説明する。先生は他に原因があると思う。リードを引っ張ったくらいでは起こさないという。少し強い薬に切り替わる。2週間分貰って帰る。この日から横になる事が多くなった。一人になるのをとても嫌がった。私が庭に居ると側で横になっている。家に入るとジュリアンもいつの間にか中で寝ている。外が好きだったジュリアンなのに寝てばかりいる。強めの薬でしんどいかなあと思っていた。食欲もない。2週間分の薬も終わり退院時にもらった薬に戻す。4日目の夕飯は久しぶりに良く食べた。

5月4日 朝5時いつもの様に起こす。「もう少し寝ようよ」というと側で横になる。10分程して準備をし5時過ぎに外に出る。河原は誰もいないのでリードを外す。今日は具合がいのだろうか、少しだけ追いかけてこをする。20分程で別の場所へ。そこでシェルティーと遊ぶ。別の犬がジュリアンを見て走って行く。ジュリアンはすごい勢いで追いかけていく。私も必死で追いかける。立ち止まっているジュリアンを見つめる。側へ行くのと逃げるので背中を向けてしゃがみ込む。すると寄って来たのでリードを付ける。途端に口の廻りがピクピクし始めた。ハッとジュリアンは我に返る。2秒くらいだったろうか。私では抱いてやれないので足早に歩く。5分くらいで家の側の河原まで戻って来た。